

# ● 第12回 国際オーボエ コンクール・東京

横谷 貴一

浅原由香が1位なしの第2位に

公益財団法人ソニー音楽財団が主催する「第12回国際オーボエコンクール・東京」が2018年9月29日(土)から10月7日(日)まで9日間にわたって、東京オペラシティ・リサイタルホールと紀尾井ホールで行われた。

このコンクールは、オーボエに特化した非常に珍しいもので、オーボエの素材で優しい音色を愛し、オーケストラのクオリティを決定づける楽器としてその重要性を唱えた同財団初代理事長の大賀典雄氏(1930~2011)の発案によるもの。音楽を通じた国際交流と音楽文化の振興に寄与することを目的に1985年から3年ごとに開催されている。今やオーボエ奏者が世界へ羽ばたくための登竜門として広く世界から認められており、バリ管、ベルリン・ドイツ響、ロンドン響、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ブルノ・フィル等々、世界一流のオーケストラの団員やソリストとして、数多くの人材を輩出している。

第1回から第7回までは東京で開催され、2006年の第8回から30周年を迎えた2015年の第11回まで長野県の軽井沢大賀ホールで行われた。2018年の第12回は、15年ぶりの東京開催となった。

第12回のコンクールには、24の国と地域から169名の応募があり、厳正な予備審査を経た46名が9月29、30日の第1次予選に臨み、そこで更に篩にかけられた18名が10月2、3、4日に行われた第2次予選に進んだ。両予選は東京オペラシティ・リサイタルホールで行われた。

第2次予選を見事に通過して10月6日の紀尾井ホールでの本選で演奏したのは、6名の優秀な奏者たちであった。

ファイナリストは次のとおり(演奏順)。

- Mr. Gioele COCO (ジョエル・ココ, イタリア, 1993年10月生まれ)
- Ms. Saran BAE (ベ・サラン, 韓国, 1996年2月生まれ)
- Mr. Andrey CHOLOKYAN (アンドレイ・チョロキヤン, ロシア, 1992年9月生まれ)
- Mr. Armand DJIKOLOUM (アルマン・ジコルム, フランス, 1995年4月生まれ)
- Ms. Natalia AULI (ナタリア・アウリ, ヴェネズエラ, 1995年1月生まれ)
- Ms. Yuka ASAHARA (浅原由香, 日本, 1993年5月生まれ)

本選では、午前中にモーツァルトのオーボエ四重奏曲へ長調K.370をクアルテット・エクセルシオのメンバー(Vn.西野ゆか, Vla.吉田有紀子, Vc.大友 肇)と共演し、午後からR.シュトラウスのオーボエ協奏曲ニ長調を、渡邊一正指揮の東京フィルハーモニー交響楽団との共演で演奏した。

6名それぞれはレヴェルの高い演奏を披露したが、第1位・大賀賞が出なかったのは非常に残念であった。

審査の結果は次のとおり。

- 第1位《大賀賞》: 該当者なし
- 第2位: 浅原由香
- 第3位: アンドレイ・チョロキヤン, アルマン・ジコルム
- 入賞: ジョエル・ココ, ベ・サラン, ナタリア・アウリ
- 聴衆賞: アルマン・ジコルム
- 奨励賞: 高橋鐘汰(日本, 1995年12月生まれ)

表彰式は本選終了後の18時から紀尾井ホールで行われた。審査委員長のハンスイェルク・シェレンベルガー氏(オーボエ奏者・指揮者)は講評で、「音楽には客観的な数値はない。審査は人間的なものもある。技術的レヴェルが達しているかだけではなく、作曲家が求めているものを表現できているかも重要である。国際的に高いレヴェル、ソリストとして高いレヴェルが求められる。楽器をコントロール下に置き、人間の感情を表すこと。自己中心、エゴに走ってはいけない。美しい、生き生きとした音楽を奏でること。常に誰のために演奏するのか、作曲家のことも考えて演奏することが大事だ。出場者のレヴェルは間違いなく高くなっている。」と述べた。

また審査委員のモリス・ブルグ氏(オーボエ奏者)は、「参加者のレヴェルが似ていたので、順位を付けるのに苦労しました。非常に素晴らしい演奏で、素晴らしい才能を審査できました。一つのミスが大きな問題となります。でも出場者は皆自身のベストを尽くしたでしょう。私たちは音楽の贈り物を得ました。このコンクールは時を経るに連れて、プレステージ(名声、信望)を得てきました。世界でも素晴らしいコンクールになった、というのがオーボエ奏者の一致した見解です。ファイナリストの皆さんは、今後も素晴らしいキャリア、長く美しいキャリアを積んで欲しい。」と語った。

更に同じく審査委員の小畑善昭氏(東京藝術大学音楽学部教授)は、次の様に述べた。「(ファイナルでは)全く違うスタイルの曲をこなさなければなりません。参加者全体のレヴェルは上がっていますが、本来、音楽は競い合うものではありません。作曲家が聴いたら喜ぶ演奏を目指し、作曲家の靈感を感じてください。演奏家のトレーニングは終わりがありません。明日からも努力を続けてください。」

上記以外の審査委員は、古部賢一(新日本フィル首席オーボエ奏者)、ゴードン・ハント(ロンドン室内管首席オーボエ奏者)、ドワイト・ベリー(シンシナティ響首席オーボエ奏者)、吉田将(読売日響首席ファゴット奏者)の諸氏。